〈教職への道より〉

高等学校の指導案による「教師の支援」について

文学部　国文学科助教授　荒　金　信　治

近頃、授業を行う上において必要となる指導案の中に一つの変化が見られ「支援」という新しい名称が加わって来た。

変化した部分を示すと、次のようになる。

「指導上の留意点（板書を含む）」

「教師の支援（板書を含む）」

管見の範囲であるが、両者を比較してみる。

これまでの指導案に見られた「指導上の留意点」は教師が生徒を指導する際、教師が行っていく授業方法とその内容の一つ一つを記入したもので、教師が学習上得たことを、あくまでも、教師の立場に立って授業の方法を指し示したものである。

しかし、「教師の支援」は授業の行う上において、教師が生徒に対する支援の方法を具体的に示したもので、それは「指導上の留意点」を更に発展充実させたものである。内容は終始生徒を指導していく為に必要且つ、具体的な支援策で一貫され、又、実施方法に伴っては明確に一つ一つ記されたものでなければならない。

故に、「教師の支援」の後には、支援における実施結果が「評価」として伴ってくる。

評価は教師が生徒に対する支援に、

1。どの様に反映されたか。

2。どの様に反応したか。

3。十分理解できたか。

を、問う教師自身の自己採点の場所でもある。

それは新しく加えられた「評価の観点」で記入されることとなる。

「評価の観点」では、関心・意欲・態度が主となり、鑑賞を基に思考力（表現能力）・判断力、また実技を基に技術能力（表現技術）に伴う理解・知識・態度、そしてその結果からくる自己評価・自己採点へと繋がっていく。

教師の支援においての語尾の使い方について記すと、

○～するように努める。

○～が出来るように準備をする。

○どうすればよいか考えるように促す。

○理解が出来るように助ける。

等が主体となり、従来の「触れさせる・比較させる」の、「させる」の語句は生徒に支援を送る先生の使う言葉としては不適当なものとなる。「させる」授業体系を変え、生徒が一番やりやすい方向へ「働き掛ける」の授業体系となる。生徒が困っているところを助ける事がこれからの授業の成立基盤になるだろう。

支援とは、教師が生徒のためにどれだけの時間を授業以外に取ったかであり、生徒から見れば先生が自分たちのためにどれぐらい時間を取ってくれたかの量と関係してくる。

また、授業が終了したとき、

○生徒に興味・関心・意欲が持てたか。

○知識や技能における理解が出来たか。

を教師が自己に問い掛け、教師の自己評価、自己採点を繰り返し行っていくことが最大の支援となるだろう。

今、大学の教授陣に於いても「学生にいかに支援するか」が問題になってきた。

学生に自分の考えを理解して貰えるためには、どの様な支援を学生に送るべきかが重要視され、大学の授業も少しづつ変化を見せている。君達に「高校生における教師の支援」を求める限り、君達を指導する我々も又、君達に対する支援策に心を燃やしているのである。